

音楽科が考える学びの価値

前島 麻美

1 音楽科が考える学びの価値

様々な音や音楽との出会いってすばらしい

2 学びの価値の設定理由

(1) 教科の特性から

日々の生活や社会の中には、様々な音や音楽があふれている。その音や音楽に対する感じ方や生活における役割は一人一人異なる。中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説音楽編では、音楽科において育成を目指す資質・能力について、「生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる資質・能力」と示されている。また、その資質・能力を育成することは、「生徒がその後の人生において、音や音楽、音楽文化と主体的に関わり、心豊かな生活を営むことにつながる」としている。

音楽科の学習は、表現及び鑑賞の幅広い活動を通して、音楽的な見方・考え方を働かせながら行われるものである。中央教育審議会答申(2016)においては、言語活動が「表現及び鑑賞を深めていく際に重要な活動である」とされたことを踏まえ、「音や音楽及び言葉によるコミュニケーションを図り、音楽科の特質に応じた言語活動を適切に位置付けられるよう指導を工夫すること」と指導に当たった配慮事項が示されている。

昨年度の本校音楽科の紀要(井上)では、学びの価値を「汎用的に用いることができる知識・技能や考え方を身に付けたり、音楽の多様性や可能性を感じ取ったりすること」としている。

これらのことを踏まえ、まずは生徒一人一人が様々な音や音楽と出会うことのできる環境を作っていくことが必要であると考え。それらとの出会いの中で、多くの音楽作品が存在していることを知り、作品の背景にある人々の暮らしや音楽文化、作品に関わる人の思いなどを感じられるようにしていくことが大切である。教師を含め、生徒一人一人の性格やこれまでの生活環境、音楽との関わり方等、様々な違いがある。そのような他者とたくさん出会い、音楽を中心とした言語活動によって他者や音楽文化についての理解を深め、そのよさや美しさを感じていくこと、さらにはこれらの経験を通して心を豊かにしていくことが音楽科の学習では可能であると考え。そのすばらしさを価値と捉え、音楽科における学びの価値として設定した。

(2) 生徒の実態から

本校の生徒は、歌唱や創作活動などに意欲的に取り組み、自分の思いを言葉や演奏によって表現しようとする生徒が多い。生徒の音楽に対する意識を知るため、令和 5 年 5 月に第 1 学年 131 名に対し、以下の調査を実施した。

①あなたの好きな音楽のジャンルは何ですか。

J-pop…29.0%、K-pop…6.1%、洋楽…14.5%、アニメ・ゲーム…27.5%、ジャズ…3.1%
クラシック…3.1%、童謡・唱歌…0.8%、演歌…0%、その他…15.9%

②友達の好きな音楽のジャンルを知っていますか。

知っている 56.5%

知らない 43.5%

上記より、好きな音楽は一人一人異なり、ジャンルも多岐に渡ることがわかる。また、友達の好きな音楽のジャンルについて知らないと回答した生徒が 43.5%と比較的多い現状も把握できた。日常生活を送る中でお互いの好きな音楽について会話することが少ないことが予想されるが、次の調査のように、音楽を通して他者とコミュニケーションをとることが可能と考える生徒が多いことも分かった。

③音楽を通して、他者とコミュニケーションをとることは可能だと思いますか。

可能である 68.8%	どちらかといえば、可能である 24.4%
どちらかといえば、不可能である 5.3%	不可能である 1.5%

また、「自分にとっての音楽とは何か。」の問いには、「楽しいもの」「元気になるもの」「人の個性や感情などを表現しているもの」「言葉や文字以外で自分の思いを表現する方法」など、様々な回答があった。好きな音楽のジャンルや音楽に対する考え方の違いを生かして授業を進めていくことで、音楽への理解や関心を深め、他者や音楽との関わりをより充実させながら、心豊かな生活を送ることができる。と考える。

3 授業者が考える学びの価値を伝える工夫

(1) 生徒が主体的に音楽に親しむことのできる授業展開の工夫

授業で取り扱う音楽に比べ、日頃身近に感じている音楽に興味をもっている生徒が多い。なぜそのような現象となるのか、日常生活の中で聴く機会の多い音楽との違いは何かを考え、生徒が主体的に音楽に親しむことができるような授業展開を工夫する。また、音楽を通して他者とコミュニケーションをとることが可能と考える生徒が多いことを踏まえ、音楽表現の工夫について話し合ったり、音楽作品の背景にある人々の生活や感情について考えたりすることで、生徒同士による学び合いを大切にしていく。また、「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）（2021）の中で述べられている「個別最適な学びと協働的な学びの一体的充実」の実現に向けて、個人・ペア・グループなど、授業展開に応じた学習形態を工夫していくことで、他者とともに音や音楽、音楽文化への理解を深めていくことができるようにする。

(2) ICT の効果的な活用

本校では、生徒一人一人が iPad を所有している。また、思考の可視化や意見の共有などを行うことのできるロイロノート・スクールを導入している。生徒はこれまでの経験から、ノートやワークシートを用いた学習と同じように、iPad での操作や文字入力をスムーズに行った学習をすることができる。本や書面での資料、iPad を使用したインターネット検索、ワークシートや付箋紙を用いた意見交流、ロイロノート・スクールを用いた意見や映像の共有など、時と場に応じて ICT を効果的に活用していくことが可能である。また、iPad を自由に使うことができることにより、音楽を比較鑑賞したり、自分の演奏を録画・録音してより良い音楽表現ができるように工夫したりすることができる。これらの環境を生かした授業づくりを心掛けることで、より充実した授業での学びが実現できるようにしたい。

(3) 様々な音や音楽、多様な他者との出会いを大切にしたい学び合いの工夫

私たちの生活する社会には、声や楽器、自然音や環境音など、様々な音がある。そのような音によってつくられる音楽には 1000 種類以上のジャンルがあるとされている。中学校の音楽科で学習する L. v. ベートーヴェンは、9 曲の交響曲や 32 曲のピアノソナタなど、F. P. シューベルトは、約 600 曲のリートや 14 曲の交響曲（初期作品、消失した曲も含む）などの作品を残した。その他、現在に至るまでの間に、多くの作曲家が数多くの音楽作品を残してきた。このように私たちの生活する社会には、様々な音や音楽が存在している。

また、外務省のホームページで発表されているデータによると、世界には 196 か国あるとされ、「世界人口白書 2023」によると、2023 年の世界人口は 80 億 4500 万人とされている。国によって、気候や食生活、言語や文化など様々な違いがあることはもちろんのこと、人々の思考や価値観も異なる。

上記のように、私たちの生活する社会には多くの音や音楽があり、多様な他者がいるが、生徒が中学校 3 年間で出会うことのできるそれらは、ほんの一握りに過ぎない。だからこそ、その一瞬一瞬の出会いを大切にしたいための学び合いの場を設定していきたい。音や音楽は、聴くときの時間や気候、聴く人の心情などによって聴こえ方が異なる。また自分の好きな音楽やジャンルによっても感じ方が違うことは確かである。それは、演奏する側にも同じことが言えるであろう。耳にすることのできる音楽 1 つをとっても、作曲者（作詞者）、演奏者、音楽制作者などたくさんの人が関わっている。これらのことについて、音楽作品や他者とのコミュニケーションを通して生徒自らが気づき、音や音楽により深く親しんだり、自分の考えや気持ちと向き合ったりするなど、様々な経験や学びによって心を豊かにしていくことができると考える。